P－14　「歯の治療学」におけるシナリオベース実習を用いた体験先導型教育の効果

○諸冨　孝彦[1]、角舘　直樹[2]、西藤　法子[1]、吉居　慎二[1]、平田-土屋　志津[1]、鷲尾　絢子[1]、大塚　麻衣[1]、藤元　政考[1]、松山　篤史[1]、浦田真梨子[1]、花田可緒理[1]、宮原　宏武[1]、西原　達次[2,3]、北村　知昭[1]

[1]九歯大・口腔保存、[2]九歯大・歯科医学教育センター、[3]九歯大・感染生物

本学では歯科医学・医療の統合教育を目的に、複数科目の臨床基礎教育実習に一人の仮想患者の初診から終診までを想定したシナリオベース実習を導入している。当科が担当する歯の治療学では、学生は予習課題に関する自己学習レポートを提出し、体験実習を受講し、実習後に内容に即した講義を受け、技術習熟のために定着実習を行うという体験先導型臨床基礎教育を実施している。今回、平成26、27年度の歯の治療学講義・実習最終回に実施したアンケート調査をもとに、シナリオベース実習と体験先導型教育法の有効性について検証した。

研究の主旨に同意した第３学年の全学生(26/27年度：94/97名)を対象に、歯の治療学講義・実習最終回にアンケート調査を行った。アンケートでは講義前に実習を行うことについて、シナリオベース実習について、本教育カリキュラムの他教科への導入について、実習前に行う予習と自宅学習について、使用するノートブックについての各項目を調査した。対象学生の中で74.9%は実習が先が良いと回答し、81.7%はシナリオがあった方がよいと回答した。予習は「苦痛だった」という設問に対し「(強く)そう思う」と「(全く)そう思わない」(33.5%/33.0%)が近似していたが、「予習に積極的に取り組めた」という設問では「(強く)そう思う」が「(全く)そう思わない」より多く(60.2%/10.5%)、「学習内容が記憶に残りやすい」という設問でも肯定的な回答が多かった(58.1%/13.1%)。一方、他科目への体験先導型教育の導入希望は59.7%であった。ノートブックは改訂による改善が認められた。シナリオベース実習と体験先導型教育は臨床基礎教育法として有効であることが示唆された。